
魂を排除する者と救いを見い出す者

多喜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂を排除する者と救いを見い出す者

【Nコード】

N0937C

【作者名】

多喜子

【あらすじ】

幼い頃から幽霊が見える少年奥田白ある日殺人鬼の事件の影響で街にはかなりの幽霊を見かける事になりふとした出会いにより殺人鬼を捕まえる協力をする事になる…彼は殺人鬼から死者の魂を救えるのか？そして殺人鬼に勝てるのか…

第1話・半端者(前書き)

気長に読んでください

第1話：半端者

俺は奥田白

オクダハク

中学三年生で身長は165センチ

運動神経はまあまあで成績は中の上…なのだがある悩みがある

「高校受験か…」

今は誰もが通る試練の前に少し暗くなる

家で家族とは今時珍しく仲が良い…だが問題があるとすれば経済状態…つまりお金だった

俺の家にはお金がないのであまりお金がかかる高校には入れない

そのため俺は自分は大人になったらどうなるかというのは小学生からなんとなく見えていた

プロ野球選手を始め様々な分野で成功している人達は経済状態はいい（俺の想像かもしれないが）

そんな悩みを抱える俺だがある秘密があった

……それは

「またため息かい？」

この帰り道を通るといつも通り話しかけられる…周りを見回し声の方を見ると血まみれの老人が立っている

「別に話しかけてもいいけど誰か人に見られたら俺は変な人に見られるって事忘れるなよ」

「いいじゃないか、別に誰もいないさ。」

なぜ血まみれの老人に誰も気づかないかと言うと老人はもう死んでいるからだ…

俺の秘密は幽霊が見える事…だけならいいがまだ続きがある

幽霊の声が聞こえ話す事が出来る

そしてこちらからは無理だが幽霊側からこちらに触れられる

今時こんな能力は稀だし誰も信じてくれる人はいない。

他人に言ってもバカにされるかいじめられる対象になるだけだ

せめて何か役立てようと思ったがあちらは俺の事情にお構いなしに邪魔しどんな目にあっても無視して関係なしに接するので夕チが悪い

「悪いけど宿題があるんだ。またにしてくれ」

「別にいいが最近公園にまた新入りが来たんだ。挨拶してやれ」

「また新しいのが…」

最近通り魔による事件がありそのため死者が続出している

犯人は未だに不明で警察では捜索中

殺され幽霊になった者達に聞いてみたが顔さえわからなかったらしい

「殺されたのは子供だったよ、まだ小さいのに。可哀想に」

そう言つて老人はどこかに消える

「……………」

俺には何も出来ない、普通殺人等の事件や不幸な事故は日常茶飯事だ

これは子供の頃から続いてて死んだ奴等（幽霊）から聞いて被害者になったそいつらの事を悼んだり話しを聞いたりする事しか俺には出来なかった

未だにそれは続いて俺は死んだ奴等を誰一人として救った事はない

…けれど俺にはそれ以上の事は出来ない

まして死者を救うなんて事は……

そんな事を考えながら俺は家に帰った

1・5話：殺人鬼の夜

光がない暗い道…あるとすれば月の明かりだけ…

そんな中小学生の女の子が歩いている

なぜこの女の子が外を出歩いているか…と母親のためだった。

風邪をひいた母親のために幼い少女は風邪薬を買ったため夜に出歩いていたのだ

そして暗い道を歩く中

気配と足音を殺しその少女に近づく者がいた

彼は歩いているのを見つけるとすぐに背後からナイフを刺し声を出されない様に喉を潰しそれから自由に切り刻む

たった数秒の出来事だが彼にとってはかなり充実した時間だった

「……」

終わった後はある方法を使い完全に死体を始末する

「噂で誰も外にうるつかないけど…例外はある。この子みたいな例外が…」

彼は女の子のバラバラになったが頭だけを拾い自分の頭に触れる

「ふうん…風邪をひいたお母さんのため…か。今時良い子だね、けど残念だけど君はお母さんとはもう話せない。君だけはお母さんを見る事が出来るけどね。…声が枯れるほど何度も叫んでもお母さんは気づかないだろうけどね。だけど君はここで死ななくても三日後に母が病気で亡くなり身内に引き取られそこで虐待に会い悲しみ自殺をする…何度助けを求めても誰も助けてくれないままね。そして虐待の事実は隠されたまま事故として扱われる、だったら今死んだ方が良かったはずだ」

そう言つて頭もバラバラにして立ち去る

彼にも物心がつく幼い時から幽霊が見えた

彼は生まれが特別で幼い頃から両親を亡くしていた

だが両親は亡くなる前に彼に人を殺す技術を教えていた

そして彼はナイフに興味を持ち始める

最初は適当な物

次は虫

次は動物

だが彼は命を大切に想っていた

けれど彼は苦しんでいる物を殺す人間になっってしまう

きっかけは両親と事故に遭ってしまい父と母はボロボロになった体で奇跡的に生きてしまい軽傷で済んだ子供に殺してくれとせがむ

子供は両親が苦しむのをこれ以上見たくなかった…その思いで両親を殺す

そしてその時彼には完全ではないがある能力も目覚めてしまった

未来を予知する能力と自分が殺した者の過去を読み取る力

彼の未来予知はこれから先不幸しか待っていない者、自殺する者を殺人鬼に見せる

そして殺人鬼はその者達を殺した

「夜はまだまだ…太陽はまだ街を照らさない…」

周りが更に暗くなる街には光がなくなっていた

第2話：バイオレンスシスター

家に着きすぐに部屋のベッドに横たわる

「殺人鬼…か…」

犯人の考えはよくわからないが生きている者達を殺すなんて何を考
えているんだろう…今どんな気持ちなのだろうか…

眠りにつきそうになりながらそんな事を考える

次の日

朝起きるとニュースで殺人事件の話をしていた

「また殺人…最近多いな…」

妹の沙耶サヤがニュースを見ている

「……………」

少し気になったがすぐに朝食をとり学校に行く

学校に行く途中いつもの道で老人に会う場所に寄ると誰かがいた

「だあゝかあゝらあゝ知ってる事話してくださいゝ」

茶色い髪に青い瞳

かなり身長が小さくどう見ても中学一年生に見える女の子がいる

そこまではいいかもしれないがテレビや漫画で見る教会のシスターの服を着ていた

そしてそんな奇抜な女の子は血まみれの老人に話しかけているが老人は知らないフリをしている

「っこの……こんな所でチンタラしてる暇ねえんだよ！知ってる事言わねーと……てめえに塩1キロふりかけるぞ……！」

少女は叫ぶと老人が空に逃げ出し行ってしまう

「あっ！……この……てめえ覚えてやがれ……！！後で見つけだして成仏させてやる！」

かなり大声で叫び息を荒げ老人を指刺す

「あーちきしょー！あのジジ……イ……！」

急に何かに気づいたように俺を見た

俺は慌てて視線を逸らす

こんな奴に関われば何かろくでもない悪い事に関わってしまうような気がする

「……………」

視線が痛い。早足で学校に急ぐとすると

「あなた…幽霊が見えますね」

満面の笑みで俺に話しかけてくる

「気のせいです」

そう言って目を逸らす

「いいえ…私にはわかります…あなたの力を私に貸してください」

かなり潤んだ瞳で俺を見つめ近づき手を握るが…

「悪いけ…!!…痛い!!…ちよ…痛いって!!本当に痛い!!」

断ろうとした瞬間信じられない握力で俺の手を握り締める

「お願いします…っーか強制な」

天使のような微笑みを俺に向ける

無茶苦茶だ…

何とか手を振り払い学校に向かい逃げ出す

「あ…てめえ、待ちやがれ!私から逃げられると思うなよ!」

最後にそう聞こえたが俺は無視して学校に向かう

学校に着き教室に入り窓を見る

まだ学校に着いてない生徒達が見える中シスターの服を着た者はいないか確かめる

一体何だったんだ…

イスに座り考える

見知らぬ女の子が老人の幽霊に話しかけていたが相手にされないの
で急に怒り狂ったあげく幽霊に逃げられる

それだけならまだしも俺に気づき何かの協力を求めてくるのだが俺
は断ろうとしたら急に手の骨を折ろうとしやがった…

ついてない…かなりついてない…類は友を呼ぶというがあんな乱暴
な女とは出来れば知り合いになりたくない…

そう思った瞬間教室のドアが開き先生が入って来る

いつも通りの朝の挨拶で終わると思ったが続きがあった

「急にだが転校生だ。みんな、仲良くしてくれ」

急に悪寒がする

「初めまして、セイラ・レスティアです。」
それはどう見ても今朝に会った女の子だった

「名前は外国人みたいですがイギリス人と日本人のハーフです。親の急な転勤でこちらに引越して来たばかりでまだ慣れていませんがそこは大目に見てください。それではみなさん、よろしくお願ひします」

丁寧に挨拶をする

かなり協調性があり休み時間にクラス全員に挨拶をするが…

「こんにちは…」

俺はこの女と合わないらしく話しかけられた時に寒気がした…

昼休みになる

「少しお話しよろしいですか？」

急に話しかけてくるので戸惑ったが断ろうとしたら何か腹に強力な一撃が当たる

「な………」

よろめくが片手で支えられる

「ありがとうございます。ではあちらに移動しましょう」

俺はどこかに連れ去られる…

でしなれど今は同じじい……としか俺はでしなれど？

第3話：セイラ・レスティア

私はセイラ・レスティア

イギリスと日本人のハーフで幼い頃から幽霊が見えた…

そして9歳になった時聖母マリア様やキリスト様のために祈りを捧げる毎日をおくっていたがある時事件が起きる

私の体が悪魔に乗っ取られてしまった

そして地獄の日々をおくる毎日…

だがある日一人の警官が来て私の中の悪魔を退散させたのだ。

そして悪魔退治をしたその日

私はその警官スカウトをされた

その理由は私はどうやらテレビや映画や漫画でよく聞くエクソシストとやらの資質があるらしい

私はその警官の誘いに承諾した

それからというものの私の生活は変わった

毎日特殊な訓練を受けたり普通学校では教えない様々な勉強に医療の技術

そして私は努力に努力を重ね三年後に現場で助手として様々活躍した
そしてある日最年少で警察の特殊な捜査官になったのだった

「そして独立した私は今初任務としてこの街で起きている事件を捜
査中ってわけ」

「……………」

さて…少し状況の説明をしよう。

俺は急に屋上に連れ去られ彼女の身の上話を聞かされる事となった
わけだがどうにも展開の速さについていけない

「その…つまりこの街の事件って…」

「幽霊が見える人で特殊な能力を持っている可能性が高いわね…特
殊な能力持っているのは厄介なのよね…なんたって奴等自分は特別
だと思つてやがるからタチが悪い。てめーらは知らないだろうけど
世界には更にすげー能力持った人間やら宇宙人やらいるっての」

「…で、どーして俺にそんな話を話すんだ？」

考えてみればおかしい、俺は幽霊が見えるがこいつのような特別な
訓練は受けていないしそんな世界すら知らない

「あなた…能力に目覚めかけているのよ」

「はあ？能力つて探している人物はここにいるとか道具触れたら過
去が見えるとか？」

「それはテレビでしょ。あんなのただのインチキよ」

「…で、どんな能力なんだ？」

「まだわからないわ、目覚めるまで。私は能力が使えるけど今の時間帯じゃ無理だし何より能力者との戦闘向きだしね」

「……」

「いまちこの女の言う事は信用ならない」

「どう考えてもこれ以上関わると危険な感じがするし…第一信じていいのかと思ってしまう」

「あと…放課後付き合ってね」

「はあ？」

「この女は唐突に何を言ってるんだ」

「付き合ってよ、どうせ暇でしょ？コーヒーくらいはおごるわよ」

「警察の仕事をしているのだからお金の問題はなさそうだが…ってそれよりなぜ俺が付き合わなければならぬのだ!？」

「いいからいいから、異性の同い年で幽霊の見える人に会うのって始めてなのよね、基本的に女の子達としか話さないし大抵の男は偽物かそれを隠すかして他人のフリして気味悪がってるし」

「俺だつてそうした…がはっ！」

急に腹に強力な一撃が…

「さっ 教室に戻るつと」

この女……

学校が終わるとすぐに立ち去ろうとしたが

「来た来た」

彼女は校門で待っていたので逃げられなかった

「……」

いつどこに強力な一撃が来るかわからないので離れて歩く

「そんな離れなくたっていいじゃない。」

こいつは明るい俺は逆に暗くなるだけだ

「さっ 私の家に来て」

いきなりとんでもない事をさらりと言う

「何でだ!？」

「話があるからよ。会って欲しい子もいるし」

「会って欲しい子？」

「私の仲間、あと二人いるんだけど今日来るはずよ」

「……………」

そういえばこいつはこれでも警官なのだ…仲間くらいいるはずだ…
いるはずなのだが……………」

「俺は必要か？」

「あなたによるわね。」

少し意味深な言葉を言う

どういふ事が気になるが俺は彼女の家とやらに向かった

八割方不安だが……………」

第4話：三人の警察官

そして連れて来られた場所はどこにでもある普通の家

「ここが拠点よ」

「…どう見ても普通の家だけど」

もしかしたら映画でよく見る秘密基地みたいなものなのかもしれない

「さあ入って」

そう言っつて扉を開く

「…お邪魔します」

かなり警戒して入る

どうやら玄関は普通だが何があるかわからないし何が起きてもおかしくはないような気もする

「さて…お茶でもいれますか…そこで待ってて」

そう言っつてどこかに去る

それから30分後

時計の針の音が鳴り響く

遅いな…

そう思った時見知らぬ誰かがドアに隠れながら挨拶をする

「あの…えっと…初めまして…」

「…はあ」

よくわからないが何か気になる…

彼女はまるで幽霊のような…そんな気もする…

「……………」

急に顔を赤くしどこかに立ち去る

「何だったんだ…あの子」

「私の仲間、実力は一流。」
いつの間にか現れる

「どう見ても彼女小学五年生くらいだぞ」

「何を言ってるのよ、同じ年よ。この国じゃ立派な受験生よ」

「……………」

信じられないがそうらしい

「どうしてあんなに恥ずかしくてるんだ？」

「色々あるのよ」

「色々って？」

「色々」

何か隠しているようだがあえて聞かないようにしよう…嫌な予感がする

「あと一人いるんだけど…今買い物みたいだから待ちましようか」

三時間後

「……いつまで待たせる気だよ」

「遅いわね…道に迷ったかしら」

「道に迷うなら…買い物なんか行かせるなよ」

「お待たせしました」

急に後ろから声が聞こえる

「あつ来たみたいね」

「……………」

それはかなりの美少女つい先まで自分は何をしていたかわからない程だった

「こんにちは、タナです」

「……こんにちは」

少し気を抜けば魅了され好きになってしまいそうだがなんとか自我を保つ

「少し街の幽霊さん達にお話しを聞いてたら遅くなってしまって……」

「そう……でもあんまり情報は入らなかったでしょ？」

「はい、私達はこの国の出身ではないからでしょうか……」

「そこで……彼が協力してくれる事になったから」

「はあ！？待て、聞いてない」

「本人の意志を無視して事をすすめたらダメですよ」

「協力してくれない？」

「と言っても……幽霊達に話しを聞いても無駄だぞ。誰も知らないって言うんだから」

「では……実際に歩いて調べるしかないですね」

「は？危険だぞ、相手は殺人鬼だ。警察に任せるべきって君達警察か……」

「大丈夫よ、私達が守ってあげるから」

普通は逆のような気がするが…

とにかくこの状況からして殺人鬼を探す事になりそうだ

「それじゃあ行きましょう」

外に出かける

「…今日が命日になりそうだな」

まだ明るいはずなのだがなぜかいつもより暗くなっている気がする

「どうしてなのかわからないけど嫌な予感がするな」

「大丈夫大丈夫」

どこからこの自信が出るのかわからないがとにかく三人で探す事になった

「あと一人は？」

「彼女はもしものために救援を呼んでくれる…それと今日は夜ご飯の係」

「……」

聞いた俺が馬鹿だった…

「…誰もいないわね」

街を歩くが人一人いない…殺人が何度も続きまだ捕まっていないから当然なのだろうか…

急に何か嫌な感じが背後からしたと同時に周りの空気が変わったよ
うな気もする……これは絶対気のせいではない……

全員同じ瞬間に後ろを振り返ると一人の男の子が立っていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0937c/>

魂を排除する者と救いを見出す者

2011年1月5日18時15分発行